

a study of kingship from the earliest times to circa A. D. 300. Oxford, University Press, 1964)

P II ハーディー著

インドにおける中世の歴史家

—インド＝ムスリム歴史書の研究—

荒松雄

本書は、従来、ロンドン大学の The School of Oriental and African Studies で、インド史を分担してきた著者が、かつて同大学に提出した Ph. D. 学位論文を改訂したものである。研究内容そのものが興味あるばかりでなく、いわゆる中世インド＝ムスリム史の研究の現状にてらして、方法上、きわめて重要な問題を提出していると考えるので、ここに紹介しておきたい。

本書は、簡単にいえば、十四・十五世紀のインド＝ムスリムの代表的な歴史家 (historians) について、近代歴史学の立場からその歴史叙述にみられる特徴とその限界とを指摘し、それらの歴史書を扱う現代の研究者の態度と方法とについて、著者の批判的考察を述べたものである。著者自身は、「ムスリム歴史家が過去を扱った方法に見られる無意識的な歪みに関する詳細な研究の最初の試み」といつている。選ばれた中世歴史家は、デリー＝サルタナット時代の五人のインド＝ムスリムで、その著書は、いずれも、この時代の歴史

の研究のもっとも重要な史料として、十九世紀以降、研究者や歴史家によってひろく利用されてきたものである。

序文 (Preface) にさく第一章は、The Modern Study of Medieval Muslim India: Some Reflections on Trends and Methods と題されているが、第二―六章の本論の前提である。ここでは著者は、従来のイギリス人やインド人による研究や歴史叙述に見られるいくつかの傾向を批判的に概説している、例えば、近代の学者の大部分が、「歴史が政治史のみを意味した」中世歴史家の著書のかたよった内容にはほとんど依存したまま、「difficult and possible idiosyncratic historical techniques」を用いることなく、安易な「政治史偏重の傾向」に満足してきた点を、著者は指摘する。そして、この分野における近代の歴史家による歴史叙述が、本質的には中世の歴史家のそれに見られる限界を必ずしも脱けきつてはいないという点を示すことも本書の目的の一つだと述べている。

Peter Hardy は、*The Idea of History*, Oxford, 1946. の著者である故 R. G. Collingwood および彼が実際に師事した H. Butterfield のヒストリオグラフィーに関する研究の影響を受けており、「近代歴史学者の作業仮設」が、中世インドの研究にはほとんど影響していないことの非をかねて感じていた。そうした不満が、著者をして、ムスリム歴史家の歴史叙述に対する批判的研究という大きなコンテクストのなかで、インド＝ムスリム中世歴史家のその特徴を分析させたものと思われる。筆者は、本書の刊行直後にたまたま著者に会う機会を得た。西アジアにしばらく滞在していた経

驗をもつ著者のペルシア語読解力とそのムスリム文献に対する識見は相当なものがあるようである。そうした長所に加えて近代歴史学の理論と方法への著者のつよい関心がこのような研究成果を生んだのであつて、まさにそのことが本書の存在価値を高くしている。元来、ヒストリオグラフィイは、理論と技術の両面におけるひろい知識とすぐれた批判的精神とを必要とする分野であり、一般の歴史家にはなかなか難しい研究領域である。従つてすぐれた業績もなかなか出にくい。しかも文獻的知識と言語上の技術とを必須とするこの研究領域で、こうした研究が出たことはまことに歓迎すべきである。(なお、本稿で括弧を用いた部分は、いずれもこの著者の文章からの引用である。)

つて、第二章の標題は、すなはち “Treatment of History by...” ではじまり、中世インドの重要な五人の歴史家が考察の対象とされる。いわば各論ともいふべき部分である。これらの歴史家とは、Ziyā al-dīn Barānī, Shams al-dīn Sirāj Afīf, Yāqūb ibn Ahmad Sīrīnī, Amīr Khusrāw Dihlāwī, Ṭāqī al-Dīn al-Farīdī である。次にそれぞれの歴史家についての著者の見解を、順を追つて紹介してゆきたい。

(1) Barānī については、もちろん、十四世紀中葉の彼の主要著作たる *Tārīkh-i-Firuz Shāhī* が分析の対象であり、必要に応じて、彼の政治思想がよくあらわれているとされる *Fatawa-i-Jahāndārī* も引用される。サルタナット時代の歴史家のなかでも

とも重要な人物の一人であると考えられてきた Barānī については、近年その生涯や思想についていくつかの研究が公けにされているが、そのなかでも、この著者の考察にはユニークなものがある。

Hardy によれば、この歴史家にとっては、歴史 (tarīkh) は、「教訓的で、宗教的な目的をもつもの」でなければならぬ。歴史は、「宗教的真理のための必要欠くべからざる導き手」であり、「さまざまな例証をもつて教える真の宗教と道徳」の教訓である。従つて「歴史家の務めも、当然「歴史の教訓を教えること」にある。こうした Barānī の歴史観にもとづいて、著者は、奴隸王朝の Ghiyāth al-dīn Balban にはじまり、トグルク朝の Muhammad ibn Tughluq, Firuz Shāh に終るデリーのスルターンをこの中世歴史家が如何に描き、その事蹟を彼のいう「歴史の教訓」につらつて解釈したかを、巧みに要約している。たゞ、Ala al-dīn Khalīfī (1296-1316) については、“Snares and Delusions of Worldly Success for its own Sake” という小見出しを用いているが、この著名なスルターンの治世の「栄光や成功」も、結局は、当時のデリーのチンティヤール派のスーフィー Shaikh Nizam al-dīn Auliya が在位したという事実とその根拠を求めている点を指摘している。そして、Barānī が Muhammad ibn Tughluq の失敗を描いて支配者たるものへの教訓としている点、さらに次の Firuz Shāh の人格のなかに彼 (Barānī) の理想像を具体化している点を、この著者はとくに強調するのである。

こうして、Hardy にいわせれば、Barānī の歴史は、「道徳的メ

ロドラマ」である。そしてその「中世の道德劇」をつくり出すための「歴史上の事実」も、この歴史家にとっては、「信頼に価する宗教的人物がそうであつたと記録していることがこそが、まさに事実」なのである。そしてこうした「本質的に宗教的な特徴をもつ歴史書」を「歴史研究や歴史叙述の資料と振りどころとして用いることには、当然、慎重な考慮が必要であらう」ということを著者はいふたのである。このことは、末節でまとめて述べられる著者の結論の一端に他ならない。

(2) 第三章では、トゥグルク朝後期の歴史家 Shams al-din Sirāj 'Afīf とその著 *Tarīkh-i-Firūz Shāhi* が考察の対象である。著者によれば、「Afīf が歴史的眞実を確かめた判断の基準は、終極的には宗教的である。」トゥグルク朝の Ghiyath al-din Muhammad 及び Firūz Shāh について、この歴史家が *manqib* (virtues, merits) という語を用いている点に著者が注目しているのは興味がある。*manqib* とは、ふつうイスラームの聖者について用いられる語で、Afīf がそれをスルターンに対して用いている点に注目する著者は、このことを、中世インド・イスラーム歴史著作にみえるスーフイー的基調によるものと考ええる。神秘主義者の神への道の一定の段階を示す語 *maqām* (pl. *maqāmāt*, station) がスルターンの資質を示す場合に用いられているのも、同様にこの歴史書の宗教的性格によるものである。こうした解釈に関しては、著者の学識がよく示されていて、興味を感じさせられる。

Barani と同じく Sirāj 'Afīf は *Firūz Shāh* 及び

代の *imām*」であり、その治世の「状況」は、このスルターンの「神与の資質に対する単なる背景」にすぎない。彼の治下にあつて「すべての階層の人々が繁栄を享受したのもこの支配者の資質の故である」と、この中世歴史家が説くのを著者は重視する。Afīf にとつて Firūz Shāh は、「完全なる人間のステレオタイプ」であり、「神が創つた完全な人格」なのである。結論として Hardy は、Afīf にとっては、「歴史は、歴史以前に存在したものをあらわすためにのみ存在」したのである、と述べている。

(3) 第四章では、サイイド朝時代の第一次史料として重んじられてきた *Tarīkh-i-Mubārak Shāhi* の著者 Yahya ibn Ahmad がとりあげられている。その稀少価値の故もあつて今日まで多くの歴史家が依存してきたこの歴史書の著作の「動機」について、著者は、同書の記載から、この中世歴史家が、当時のデリーの支配者たる Sayyid Mubārak Shāh に用いられることを望み、そのための格好な贈り物としてこの書を著わし、彼に捧げたという説をとっている。著者によれば、この史書は「地方的なムスリム年代記」の典型である。たゞし、この年代記は、支配者の軍事的、政治的事蹟のみの表面的観察にもとづく記録にすぎない。だから、たとえば、Ala' al-din Khalij の場合にも、彼の重要な経済政策は同書から全く省かれていのである。

Yahya は年代記の作者であるが、その叙述はやはりイスラームの枠内にある。彼の過去に対する見解には「神の意志」がいつもはつきりと示されている。そして結局、仕官という動機からしても、

この歴史家が、「探求の精神よりは読者をよこさねるために」、歴史を書いたのだと、著者は指摘するのである。

(4) 第五章は、奴隸王朝末期からトゥグルク朝初期にわたつてデリーで文名を馳せた Amir Khusrāu Dihlawi を扱うが、五人のなかでもつともページが割かれている。本来の主題とあまりかゝわりのない詩文の翻訳も載せられ、著者の自信のほどをよく示している。Hardy は、この詩人の多くの著書のなかから、とくに過去を描いたものとして *Qirān al-Sādāyūn*, *Khazā'in al-Futūḥ*, *Tughluq Nama* の三著を主な考察の対象としている。いずれも奴隸王朝およびハルジー・トゥグルク両朝の支配層の動向を描く著名な作品である。Amir Khusrāu を「歴史家」とすることにはさまざまな異論があろうが、他の四人に比べると、同じ歴史を扱つてはいても、テーマの統一性がなかつたり、過去の概観的叙述に欠けていたりしている点は、Hardy も指摘している。著者によれば、この詩人が過去をその作品にまとめたのは、支配層の要請に応じたためであり、さらにまた、報酬、文学的名声を得るためであった。だから、彼は、「權威の立場の人びとを満足させ、それによつて自らの生活を保持し」ていく典型的な宮廷詩人であった。従つて彼は、「事実よりは想像」をとうとぶ。つまり、彼の作品は、「明らかに歴史的であるよりは、明らかに詩的である」のである。彼が歴史叙述を試みるに當つて、ふつうその原典や根拠を示さず、証拠に対する批判性も全く少ない点を、著者は指摘している。もちろん、Amir Khusrāu の場合でも、「人間の人格は時代やものごとの外、つまり

神によつて創られた」ものであり、「個人は非人格化され」ている。従つて、彼の描く人物は、「神か悪魔であつて、人間ではない。」

Amir Khusrāu は、ふつう、文学や音楽の面で、ヒンドゥー文化とムスリム文化との融合統一に努めた人物として、文化史上に大きな地位を与えられている。Hardy の考察はこの点でもきわめて批判的である。この詩人が「文化的統一の維持に大きな役割を演じたやり方」も、著者にいわせれば、実は、「歴史のことがらの検討の結果ではなく、パトロンたちの想像と情感とに訴えるやり方である」したのである。著者は、結局、この章を次のように結んでいる。To conclude, Amir Khusrāu did not write history — he wrote poetry.

(5) 五人のうちの最後は、Isami である。彼の主著 *Futūḥ al-Salāṭīn* と、Barani の *Tarīkh-i-Firuz Shāhī* より七、八年前に書かれたものだが、両者は全く独立している。Isami は、この史書を、デリーの支配権力に追われたバハマーン朝初代の支配者、Ala' al din Hasan Bahman Shah に捧げており、従つて両者の内容の差異は、研究者のあいだでも、有益でしかも興味ある対照としてとりあげられてきた。

この史書は、「インドを離れてメッカへ巡礼したいと考えたほどに」失意の底にあつた、Isami が、新しい仕官の機会に遭遇して、バハマーンの支配者の寵愛を獲得すべく書いたのが、この著作の動機である。と Hardy は説明する。「バハマーンへの Firdausi」たんとするこの文人は、事実その主題の撰択に、このガズニー朝の

詩聖の *Shah Nama* をおぼえているのは周知のとおりである。

‘Isami’を、著者は、Barani よりもむしろ Amir Khusrāu に近いものとして考えている。彼の描く過去は、「徳と悪徳とのスペクタクル」であり、しかも、そこでは正統派スンニーがつねに酬いられるのである。Hardy によれば、‘Isami’の描く人物は、歴史的状况のなかの人物というよりはむしろ文学的描写の対象である。従つて、彼らは「英雄か悪人か」である。ガズニーの Muhammad やハルジー朝の ‘Ala’-din は前者で、Muhammad ibn Tughluq は後者である。もちろん、トググルクの権力に追われた人物をそのパトロンにもつていた ‘Isami’ にとっては、Muhammad を批判的に描くのは当然であつた。それはむしろ「悪罵」に近いといつていい。著者の指摘のうちで面白いのは、‘Isami’ の場合には、他の歴史家と同じくスーフィズムに対する尊敬の念はあつても全体としてその比重が比較的に少ないとした点である。結局、この中世インドの文人に対する Hardy の評価は、章末の次の文章に要約されてゐるといえよう。Consequently, the Futuh al-Salatin is, to sum up, not a critical history, not a theology, not an ethic, but an epic.

以上のような五人の歴史家に対する個別的な考察のあとを受けて、著者は、第七章 Some General Characteristics Analysed で、「中世インド・ムスリム歴史家」の特徴をいくつかの問題点に総括している。

まず、彼らが扱つたのは、結局は、支配層の事蹟であり、しかも、それらが、「純粹にパーソナルな描き方で記録されている」点を指摘する。そして、これらの歴史書の著作の動機と根拠の主なものとは、「真の宗教すなわちイスラームの説くところに奉仕するため」である点が強調される。これらの著作のイスラーム的性格とそのため「歴史」としての限界の指摘は、この章の第一の目的である。

ところで、これらの歴史家の叙述が、「ほとんどヒンドゥスターンのムスリムの事蹟のみに集中されている」のを著者が指摘している点とはくに注意する必要がある。ヒンドゥーは、ふつう叙述の対象とされないが、彼らについて描かれる場合でも、ムスリム側の立場から受身的に記録され、結局は、「ムスリムの徳性をひき立たせるため」にとり上げられるのである。Amir Khusrāu でさえ例外ではなく、さきにもちよつと触れたように、彼がヒンドゥーやヒンドゥー文化を描くのも、その文化や宗教や社会そのものの理解のためではない。こうした著者の指摘は、歴史書論をはなれて、現代の歴史研究の問題そのものに真向から触れている点でもあり、注目されよう。しかも、著者は、これらの中世歴史家たちを、「いわば、インドにおける最初のムスリム・コミュニリスト」とまで断じているのである。

彼らの描いた歴史的過去は、このようなムスリムの限界の故に、「つねに宗教的な色眼鏡を通して観察されている」従つて、結果は、「事実」よりも「宗教的真実」と考えられることの方の比重が大きい。だから「神が、勝利を与え、王座をとらせ、悪行を罰し、

死を宣告するのである。そして、事物の決定の最終的役割は、つねに神の命令にゆだねられるのである。そこでは、正統派の倫理と、「神の人々」としてのスーフィーの意義と役割とが高く評価されるのがふつうである。一部の文人の描く「歴史」では、想像や審美が事実を優先することさえある。そこでは、「事実のドラマ」よりも「ドラマの事実」の方が関心事なのである。（こうしたシャレたい方々を著者は好んで使っている）。そして、真の歴史は全く歪められてしまう。

資料に対する歴史家の態度も特徴的である。彼らの多くは「權威ある資料」にもとづいて歴史を記すが、その權威の意味は、「なかば宗教的」である。そして何よりも先人の著作が尊重される。「歴史的事実とは、誰かにより、何処かで知られている何か」であり、「歴史家自身の批判的考察によつて発見されたものではない」のである。

終章で *The Historians and the History of Medieval India*. Some Conclusion と題され、主に近代の歴史研究者の中世歴史書に対する姿勢が論じられる。歴史家は、これらの歴史書が「提供するデータに関して受身の態度をとることは許されない」。著者によれば、結局、「彼らのいうのは歴史ではなく、歴史のなまの資料」にすぎない。従つて、歴史家は自らの批判力をもつてこれらの文献を利用する必要があることがくり返し強調される。考えてみると、このことは、Hardy に指摘されるまでもなく、歴史学を正当に志すものが当然心すべき出発点なのである。

しかし、こうした資料を利用する限り、この時代の政治史は書けないのだと主張しているのではないことを、著者はつけ加えている。だが、文献以外の資料の活用と、新しい方法の模索とが一つの打開の道であるといっているものの、著者の態度は、この点では、相当消極的のようである。「政治的研究が、そもそも、中世という時代自体の性格にあわなないものなのかも知れない」といふ、また、「歴史家はその視点をさげて、当分は、利用できる証拠の範囲に限るのがいるのかも知れない」といつているのは、著者のそうした姿勢を示してはいしないか。

著者の批判と疑問とは、これまでの中世史では、「はたして問題の提起さえも正当になされてきたかどうか疑問である」という、歴史学、歴史叙述、歴史研究の近代的なあり方に関する彼の基本的な立場から出発しているのである。一つの方途として著者は、「宗教と文化の面で、この時代の人間のメンタリティーに関する問題提起がなされるべき」で、それが、証拠資料の不足を補うか、政治的事からの解釈をある程度可能にしたり、近代の歴史家の技術の欠除を補い得るかも知れないと述べている。そして彼は本書を次の言葉で結んでゐる。The History of thought is not the whole of history, but there is no intelligible history without it.

さて、本書の意義は、以上に紹介してきた内容の概略によつてすでに明らかであると思う。著者の發言のねらいは、なにも新しい創見でもユニークな批判でもなく、実は、近代の歴史家が当然心す

べき出発点なのである。しかし十九世紀以来今日に至るまで、学界が、こうした問題点をそろそろかたして来たこともたしかである。従来のインド・ムスリム中世史の研究や歴史叙述は、これらの中世資料に全面的に依存してきたが故に、またその資料がきわめて少なく、従つてその稀少価値のみが誇大に強調され、そのため、著者への注目や史料批判が正当になされないままに、主要な資料として用いられてきた。そればかりか、一部では、これらの中世歴史家の「歴史」が、そのまゝヨーロッパ語にひき写されて、近代の研究、歴史叙述の業績を代表してきたことさえあるのである。従つて当然わかりきつていふような Hardy の発言でも、学界の現状にてらせば、全く大きな意味をもつ警告として受取ることができるのである。もちろん、この著書の第一の意義は、ムスリムのヒストリオグラフィーに対する知識と語学力をよく用いて、インド・ムスリム中世の歴史書の内容を分析し、その背景と著作の動機への探究を試みて、イスラーム思想と歴史叙述の背景のなかでその特徴と限界とを指摘したことにある。そしてその点ではきわめて説得的な成果を生んでいるといえよう。しかし、著者は、本書をそうした研究のみにとどめなかつた。著者は、近代の歴史家の研究と歴史叙述の姿勢に対して彼の立場から批判を試みた。これが本書の第二の意義で、それについては、研究者は謙虚に耳を傾けるべきであると私は思う。

もつとも、本書には、著者のイスラーム研究とペルシア語読解力、近代のヒストリオグラフィーの研究についての自信が行間の至るところに感じられるが、その自信がときにかなり独自の断定的な

表現をとらせている。たとえば、さきにもちよつと触れたように、五人の中世歴史家を「最初のムスリム・コミュニリスト」と断言しているが、こうした表現は、そのまゝでは、正しい意味で「歴史的」であるとはいえない。このような著者の考察は、例えば本書に対する I. H. Qureshi の短い書評⁽¹⁾にもうかざるように、読者をして一種の抵抗を感じさせるであらう。そもそも著者の考察は、ヒストリオグラフィーの研究者としてのものであつて、歴史研究、歴史叙述の主体としての歴史学者としては、いわば、むしろ傍観者的である。近代の歴史叙述の立場から中世の歴史書の限界を指摘し、批判しただけでは、歴史学に従うものの立場は貫くことができない。むしろ、歴史研究は、そこからはじまるべきものだといえるからである。その点は著者が、それは自分の領域ではないといつて済ませ得ることがらではない。このすぐれた学者が、インド・ムスリムの中世史の歴史叙述を如何なる方法と内容とによつて試みるだらうかということに関心を寄せるのは筆者ばかりではあるまい。

しかし、本書を読了して、著者が提出した批判自体に反撥を感じたとしたら、それは現代の歴史学研究者としてむしろ失格であるといつても過言ではあるまい。本書は、その点で、私がくり返し述べたように、学界への大きな寄与でもあるが、また同時に正当な警告でもある。良心的な歴史家は、中世インド・ムスリムの歴史の研究の方法上の難しさを改めて痛感させられるに違いない。たゞ、著者もいつているように、中世の歴史書は、「歴史」ではないが、「歴史のなまの資料」である。だから問題は、これを、如何に、正当な方

法で活用するかという方法にかゝっている。批判に十分堪え得るかどうかの慎重な考究を経た上で、これらの資料から抽出利用できることがらは、問題によつては、なお豊富に残されているのである。

また著者も少しふれているように、貨幣や刻文を用いる研究は、これらの文書の欠陥を補う重要な方法であるが、さらに、遺跡や建造物、あるいは絵画などは、狭義の美術史、考古学の範囲をこえて、ひろく歴史学の資料として利用し得る十分な価値を備えている。ペルシア語以外の地方資料も今後は一層注目される必要がある。

これを要するに、本書は、難しい分野であるだけに、並の研究者が為すべくして為し得なかつた研究の最初のまゝあつた業績として、高く評価されるべきである。著者 Hardy は、本書刊行と前後してこの問題と関連する論文をいくつか公表している。紙幅の余裕がなく、それをあわせて紹介し得なかつたのは残念であるが、理論と技術の両面で高度な知見を必要とするきわめて困難な研究領域だけに、これにより広い研究面での著者の今後の研究に期待した。

(P. Hardy; *Historians of Medieval India, Studies in Indo-Muslim Historical Writing*. vii, 146 pp. London, 1960.)

註

(1) B. S. O. A. S., Vol. XXIV, 1961, pp. 371-372. I. H. Qureshi の批判は、結局次のように結ぶところ。Dr. Hardy would have succeeded better in his effort if he had maintained the right proportion between criticism and

appreciation. Qureshi の文章はむしろ印象批判の感がいろいろが、彼自身がイスラムの学者であり、ひろい意味では Hardy の批判する対象の一人でもあつた点に留意すべきであらう。

(2) 著者は *Encyclopaedia of Islam*. (New Edition) に Amir Khusraw, Barani などの項目を担当しているが、他に、本稿と関係あるものの数例を挙げれば次のような論文である。

The *oratio recta* of Barani's *Tarikh-i-Firuz Shahi*—Fact or Fiction? B. S. O. A. S., Vol. XX., 1957, pp. 315-321.

The *Tarikh-i-Muhammadi* by Muhammad Bihamad Khani. *Sir Jadunath Sarkar Commemoration Volume*, II. Essays Presented to Sir Jadunath Sarkar, Hoshinapur, 1958, pp. 181-190.

Islam in Medieval India. *Sources of Indian Tradition*, New York-London, 1958, Part Four. pp 367-528.

Some Studies in Pre-Mughal Muslim Historiography; Modern Muslim Historical Writings on Medieval Muslim India. *Historians of India, Pakistan and Ceylon* (ed. by C. H. Philips). London, 1961, pp. 115-127, & pp. 128-309.